平成27年度 進路だより

Frontier Spirit!

J Hirata

第 5 号
H27.08.26
文責：﨑田

△宿泊学習会の学習風景

＜夏…4泊5日の宿泊学習会in西湖くわるび＞

８月１日(土)～５日(水)、４泊５日の日程で、西湖畔にあるホテル光風閣くわるびを貸し切って、本校の夏季宿泊学習会が行われました。

第１・２・３学年の理数科、普通科理数クラスのほぼ全員と第３学年普通科普通クラスの希望者を合わせて約 300 名が臨んだこの行事は、朝から晩まで「自学自習」の体系で行われるもので、１日当たり 10 時間以上の学習に打ち込む、文字どおり勉強漬けの５日間でした。

進路だより「Frontier Spirit」第４号(７月 24 日発行)では、第３学年生徒に対して「**学校に戻ってくるころ、あなたには「受験」に対する確固とした覚悟が芽生えるはず**。」と書きましたが、あれから 20 日余りが過ぎた今、第３学年生徒の皆さんにとって目の前の風景はどのように変化したでしょうか。「勉強モード」が宿泊学習会を契機として増幅中であることと思います。

先日、私を訪ねてきた卒業生は、昨年の経験をこのように語りました。

> 周りがコツコツ勉強している姿を見て、「私も絶対に負けられない」って思った。部屋に戻った後も皆、単語帳を開いたり、参考書を読んだりしながら一人一人眠りに落ちていくような感じだった。
> ○○が２日目の朝から最終日まで、起床時間よりもかなり早く起きて、学習会場に行って勉強しているのを見て、頭が下がった。
> 勉強合宿だから、友だちとおしゃべりする時間はあまりなかったけど、食事中にはワイワイやってたし、本当に充実していた。もう一度、行きたいなぁ。

この行事を通じて**学習時間を確保し、受験生モードの生活習慣を軌道に乗せ、周囲の仲間に触発されながら頑張った経験**は、良い経験だったようです。

今回、４泊５日の宿泊学習会に参加した３年生の皆さん。２学期以降、あなたたちが教室内で“雰囲気”をつくってくれることを期待しています。

参加しなかった３年生の皆さん。この行事に参加することの是非はありません。ただ「学習に打ち込む」環境で５日間、頑張った仲間がいることは事実です。今後、お互いが切磋琢磨していってくれることを期待しています。

第１・２学年については、理数科と普通科理数クラスの生徒しか参加する機会がなかったわけですが、参加した者の目に“先輩たちの姿”が焼き付いていてくれれば嬉しく思いますし、来年度・再来年度にはあなたたちが同級生や後輩の目に鮮烈な衝撃を与えてくれることを期待しています。

そして、第１・２学年の普通科の皆さん。来年度もしくは再来年度にはあなたたちも宿泊学習会の主人公になっていきます。**自らの限界点を広げていく５日間は貴重な時間**となるはずです。その「貴重な時間」を何倍もの成果につなげられるよう、「今」を大切にしてくれることを期待します。

９月の進路関係行事

３(木)	月曜日授業
４(金)	大学入試センター試験説明会③
	進路希望調査③
５(土)	土曜課外①②
	土曜講座①
	登校学習会②
	理社課外③
	小論文課外③
	サイエンスフォーラム①
	ＳＳＩ
９(水)	小論文面接説明会③
10(木)	球技大会
11(金)	サイエンスフォーラム②
12(水)	土曜課外①②
	土曜講座①
	登校学習会②
	理社課外③
	小論文課外③
	サイエンスフォーラム①
18(金)	職業人講話③
19(土)	進研マーク模試③ ［～20(日)］
	土曜課外①②
	土曜講座①
	登校学習会②
	ＳＳＩ
21(月)	● 敬老の日
22(火)	● 国民の休日
23(水)	● 秋分の日
	理数科説明会
24(木)	定期試験時間割発表
	科目登録説明会①
	スタサポ結果報告会①
	大学出張講座②

※○数字は学年を示します

<戦後70年…この毎日が永遠に続くように!!>

今年の夏もＴＶ画面の向こうでは、「真紅の大優勝旗」を目指して高校球児の熱い戦いが展開されました。第 97 回全国高校野球選手権大会…、開会式で選手宣誓に立った鳥羽高校（京都府）主将梅谷成悟くんは「1915 年８月、第１回全国中等学校優勝野球大会が始まりました。…**この100年間、日本は激動と困難を乗り越えて、本日の平和を成し遂げました。…次の100年を担う者として**、8 月 6 日の意味を深く胸に刻み…」と力強く語りました。奇しくも鳥羽高校の前身は 100 年前の第１回優勝校「京都第二中学校」…大先輩が偉業を成し遂げた聖地で、「100 年」後の後輩が檜舞台に立ったわけですね。

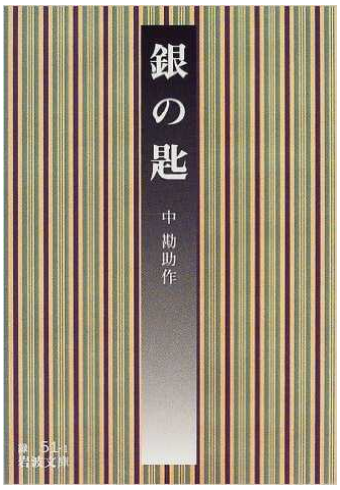
ただ栄えある**100年目の今年が「97回」大会…ということが何となく残念な気もします。大会が100回に満たない理由は言うまでもなく戦争**でした。

余談ですが、昭和 17（1942）年に「幻の甲子園」とよばれる大会があったことを知っていますか。文部省（当時）とその外郭団体であった大日本学徒体育振興会主催の大会で、連盟と朝日新聞社主催の本来の大会ではないため、「幻」とよばれます。大会自体が甲子園大会の回数に数えられていませんし、個人レベルの記録さえ“公式”のものとしては認められていません。

この大会は「戦意高揚」を目的としたもので、スコアボードには「勝って兜の緒を締めよ 戦い抜こう大東亜戦」と掲げられたそうです。試合時のサイレンは進軍ラッパ、ユニフォームのロゴは漢字のみ…、また「打者は球を避けてはいけない。球に当たっても死球にならない。」「怪我以外の選手交代は認めない。」などの特別ルールが敷かれ、エラーをした選手に軍人が殴りかかるという一場面もあったそうです。それでも球児たちは野球ができることに喜びを感じたのだと聞いています。

自分のことを考えられる今がどれだけ幸せか…、私が中・高校生のころ、当時の私と同年代を戦中に生きた両親や学校の先生たちは口を揃えて言いました。**今年は戦後70年**…、様々な場面で「戦争」「平和」について考える機会がありますが、この「今」が新たな戦前になることがないように、…上述した甲子園大会の**大会回数の誤差を増やさずに**、次代を築いていきたいと願うばかりです。

＜南高生に読んでもらいたい一冊＞



『銀の匙』（岩波文庫）は、中勘助の自伝的小説で、夏目漱石が絶賛した名作です。前編は明治 44 年、後編は大正２年に発表された古い作品ですが、その内容は**100年以上を経た今なお色褪せない新鮮さ**を持っています。

“伝説の教師”といわれた灘中学校・高等学校の国語教師橋本武（故人）が中学３年間をかけて、国語の教科書を一切使わずに一冊の本を読み上げるという授業を展開した際の教材として使われたことでも有名です。

「私の書斎のいろいろながらくた物などをいれた本箱の抽匣（ひきだし）に昔からひとつの小箱がしまってある。…そのうちにひとつ珍しい形の銀の小匙のあることをかつて忘れたことはない。」病弱だった“私”のために“伯母さん”がどこからかさがしてきて始終薬を含ませてくれたときに使ったのだという、その銀の匙から、伯母の無償の愛に包まれて過ごした日々が回想が始まる。子どもの持つ感情世界が素直に描き出されていて、その感受性の強さには驚きと共感を覚える一方、**一つ一つの描写を理解するには教養が必要で、読み応えがあります**。３年間の国語の授業で用いるには十分すぎる、その奥の深さは頁を進めるごとに読む人の心を魅了することと思います。

「**人びとは多くのことを見馴れるにつけて、ただそれが見馴れたことであるといふばかりにそのままに見過ごしてしまう**」…純粋な“子ども”の目から見える真理を突いた一言が印象的でした。

山梨県立甲府南高等学校
進　路　指　導　部

URL　http://www.kofuminami-h.ed.jp
E-mail　shinro@kofuminami-h.ed.jp